

【第77回生涯教育講座】

加齢黄斑変性の臨床と治療

おお ひら あき ひろ
大 平 明 弘キーワード：加齢黄斑変性，黄斑色素，白内障，危険因子，
共鳴ラマン分光法

加齢黄斑変性とは

ヒトの黄斑は視力に重要な部位で、網膜の中心にある。加齢黄斑変性は加齢に伴い黄斑に障害が生じ、重篤な視力障害を来す疾患である。現在、日本で難病に指定されている121の特定疾患のひとつである。原因は不明であるが、遺伝、心血管疾患、環境あるいは栄養のような素因が複雑に絡み合った多因子疾患と認識されている。

黄斑が一旦、障害されると急激な視力低下、変視症、中心暗点を訴えるようになる。黄斑に限局される病変では、中心視力は障害されるが、それ以外の網膜は機能が保たれるため、完全失明することは少ない。しかし病気が進行し、脈絡膜に新生血管が生じると、網膜下や硝子体に出血が来たり、網膜剥離を起こし、重篤な視力障害を来す。

有病率

本症は欧米では50歳以上の中途失明者で第1位を占めている。米国では、65 - 74歳の人口の16.1%で、75 - 86歳では22.6%が中心視力を損ねてい

る¹⁾。日本では増加傾向を示すとされているが、正確な頻度は明らかではない。福岡県久山町での50歳以上の住民を対象にした前向きコホート研究では有病率は男性で1.7%、女性で0.33%だった。また本症は大別すると2つに分類されるが、萎縮型と滲出型がある。久山町の調査ではそれぞれ0.2%と0.67%で計0.87%だった²⁾。これらの性差と病型は欧米の結果とは全く逆を示す。Beaver Dam Eye Study¹⁾、Blue Mountains Eye Study³⁾などの疫学調査が有名で、人種差は明らかである。

加齢黄斑変性の分類

病気の進行から初期と後期に分けられる。初期加齢黄斑症では軟性ドレーゼンと網膜色素上皮の異常が見られる。後期加齢黄斑症には前述の萎縮型と滲出型がある。

萎縮型は脈絡膜新生血管が関与せず、網膜色素上皮細胞が地図状に萎縮し、黄斑の反射が消失している。欧米ではこのタイプが90%を占めている¹⁾。滲出型は脈絡膜新生血管が関与し、網膜色素上皮の剥離や網膜下出血あるいは瘢痕組織が形成される。わが国では77%はこのタイプと言う²⁾。

自覚症状

網膜の中心部が悪くなるため、視野の中心が暗

Akihiro OHIRA

島根大学医学部眼科学講座

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89 - 1